

## 在宅看護論実習における地域包括支援センター実習の学習効果 ——実習記録からの分析——

関川久美子\*, 田山 友子, 峰村 淳子

**Key Words**: 看護基礎教育, 地域包括支援センター, 在宅看護論実習, 看護学生

**【要旨】** 本研究の目的は、本学の在宅看護論実習における地域包括支援センター実習の学生の学びの内容を分析し学習効果を明らかにすることである。学生の学びの分析結果として【他職種および地域連携】【安心した生活が送れるよう支援】【QOLの維持・向上への支援】【自己の看護の意味づけ】の4カテゴリーが抽出された。

これらの学びは、地域包括支援センターの役割を理解すると共に、地域で暮らす対象者への看護や連携の必要性、そして自己の看護観につながる学びをしていたことが明らかになった。また、その学びの内容は、概ね実習目的・目的を達成していた。

### I. はじめに

わが国の人口は、65歳以上の高齢者が総人口の占める割合の25.0%で過去最高となり、ほぼ4人に1人が高齢者と言われる超高齢社会を迎え<sup>1)</sup>、さらに要介護・要支援高齢者や認知症高齢者、高齢がん患者の増加等、継続的に多くの支援を必要とする在宅高齢者は増加する一方であり、日本社会の重要な課題である<sup>2)</sup>。また、介護保険制度の改正や医療改革、在院日数の短縮化など社会情勢も刻々と変化している。その中で、地域包括ケアシステムという考え方の下、要介護・要支援高齢者の一次的な窓口となり、高齢者が住み慣れた地域で生活が継続できるよう支援するため、2006年の介護保険制度の改正では地域包括支援センターが創設された。この機関において、保健師または看護師は必置となっており、地域ケアの重要な一翼を担っていることから、看護基礎教育における在宅看護において、地域包括ケアの教育的意義は大きいと考えられる。

2009年のカリキュラム改正において「在宅看護論」は統合分野に位置づけられた。その意味は、在宅看護の対象者が年齢別、疾患別、症状別という分

類ではなく、地域で生活している全ての人々が対象であり、社会資源を有効活用しながら関係職種と連携していくことに特徴があると考えられる。

こうした背景に伴い、本校の在宅看護論実習では、訪問看護実習や在宅療養支援診療所実習、退院調整部門実習、外来実習のほか、地域で暮らす高齢者への支援や医療と福祉チームの連携・協働を学ぶ場として2010年度から地域包括支援センター実習を導入している。

臨地実習の意義・効果・ねらいは、講義で学んだ看護と、実践で学んだ看護が一致し、実習という体験を通して看護の役割を深めることにある<sup>3)</sup>。つまり実習で得た学生の学びの内容は、在宅看護論としての教育効果を知る貴重な資料になり得ることから、この研究は意義があると考えられる。さらに、退院調整部門実習や大学病院外来実習の導入により、退院後の生活を見据えた関わりの大切さや継続看護の重要性<sup>4)</sup>、関係職種との連携<sup>5)</sup>を学んでいることから、より地域包括支援センター実習の学びを深める機会になっていると考える。

先行研究では、地域包括支援センター実習での看護職の役割としてヘルスプロモーション活動や介護

\*埼玉医科大学短期大学看護学科

予防の啓発・啓蒙活動の必要性<sup>6)</sup>や地域包括支援センターの役割理解<sup>7)</sup>を報告しているが、地域包括支援センター実習に焦点を当て、学生のレポートから学びを分析し教育方法に反映させている研究は少ない。

そこで、本研究は、地域包括支援センター実習の実習記録から学びの内容を分析し、在宅看護論実習の目的・目標の到達状況と比較することで学習効果を明らかにし、地域包括支援センター実習を在宅看護論実習として位置づける意義を見出し、教育方法の検討を行うことを目的とした。

## II. 研究方法

1. 研究対象者：B看護専門学校3年課程で在宅看護論実習を終えた3年生68名
2. データ収集期間：2014年5月～11月
3. データ収集方法

地域包括支援センター実習の学びを記述した実習記録用紙（A4サイズ1枚）の内容を分析対象とした。学んだことや考えたことを字数制限なく記述するように求めており、実習終了後に提出してもらった。

### 4. 分析方法

地域包括支援センター実習の実習記録の中で、学びを表現している記述をそのまま抽出し、意味内容が損なわないよう、また内容が明瞭になるよう書き表しコード化した。全コードの類似性に注目し、意味内容が類似したものを集め、共通する意味を表すように表現し、サブカテゴリー、カテゴリーとした。また、データの妥当性を高めるため、研究者間で繰り返し検討した。

### 5. 倫理的配慮

本研究は、本学倫理委員会にて承認を得て実施している。さらに、研究協力者には、研究参加は自由意思に基づくものであること、強制ではないこと、研究参加の諾否が成績には一切影響しないこと、無記名であり個人が特定されることはないこと、同意はいつでも取り消すことができ、そのことによる不利益は生じないこと、得られたデータは研究目的以外に使用することはないこと、研究結果は、今後の教育に生かすことを文書および口頭で説明し、同意を文書の提出にて承諾が得られたと判断した。

### 6. 在宅看護論実習の概要

在宅看護論の講義は2年次までに履修し、3年次5月～11月において領域別看護実習を行う。在宅

看護論実習は、90時間（2単位）であり、実質2週間1クールで行い、1グループが8～9名で9グループの編成となる。

主な実習施設は、地域包括支援センターの他、在宅医療部門、大学病院外来部門、退院調整部門、訪問看護ステーション等である。訪問看護実習は2週目に3～4日間行い、他の実習は1週目に1日行うが、グループにより実習形態が異なることもある。また、他領域実習と違い、実習施設が多岐に渡るため、1グループ1～5名で各施設に出向き、見学や指導を受けながら一部実施するという学習形態が殆どである。

地域包括支援センター実習の目的・目標は以下に示す。

#### 1) 実習目的

地域で生活する人々とその家族への看護を実践できる基礎的能力を養う。

#### 2) 実習目標

- (1) 地域で生活していけるよう総合的に支えるサポートシステムを知る
- (2) 自立支援の実際を知る
- (3) 関係職種との連携の実際を知る
- (4) 社会資源の情報提供と活用方法を理解する
- (5) 自己の看護観を深める

#### 3) 実習施設の概要

地域包括支援センター実習は、5か所の支所で行っている。保健師または看護師、社会福祉士、主任ケアマネジャーの1名に学生1～2名が付き、同行訪問を中心として、介護予防教室やケースカンファレンスの参加、電話相談、利用者・家族との面接場面などの見学を行っている。

在宅看護論実習前の全体ガイダンス時には、地域包括支援センターの指導者から役割等についての講義を行ってもらっている。

## IV. 結果

地域包括支援センター実習から学生が得た学びを分析した結果を表2に示す。381の文節、27のコード、10のサブカテゴリーと4つのカテゴリーが抽出された。以下、抽出されたカテゴリーを【 】, サブカテゴリー〈 〉, 代表的なコードを「 」で示す。

### 1. 【他職種および地域連携】

〈他職種と連携する〉〈地域全体と連携する〉の2

表1 地域包括支援センター実習から学生が得た学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
他職種および地域連携	他職種と連携する	他職種と情報を共有する 他職種との信頼関係を築く
	地域全体と連携する	インフォーマルサービスと連携する 地域でネットワークを作る 顔の見える関係作りをする
安心した生活が続けられるよう支援	対象者の個性を理解する	生活習慣や生活背景の個性を大切に 価値観を尊重する
	信頼関係を構築する	ニーズに合わせて関わる 意思を尊重する 一緒に考えていく 受容する 傾聴する コミュニケーション技術が必要である
	安心できる環境を作る	安心につながるよう関わる 緊急時の連絡体制を整える 不安や悩みに対して的確に答える
	迅速に対応する	生活全体から情報収集する 小さな変化を見逃さない 予測した対応をする
QOLの維持・向上への支援	社会生活の維持を支援する	社会や人とのつながりを作る 生きがい作りのサポートをする
	自立した生活が送れるよう支援する	情報や社会資源を提供する 自身で行えることが拡大するよう支援する
自己の看護の意味づけ	自己の看護を振り返る	退院後の生活を見据えた関わりをする 入院中から介護状況や生活状況を把握する 寄り添った看護を行う
	幅広い知識を身につける	幅広い知識を身につける

つのサブカテゴリーで構成された。

〈他職種と連携する〉は、学生がサービス担当者会議やケースカンファレンスの参加、相談場面の見学から「他職種と情報を共有する」ことや「他職種との信頼関係を築く」ことの重要性を学んでいた。また、〈地域全体と連携する〉は、専門職だけでなく、近所住民やボランティア・ガス会社・警察・新聞屋・コンビニエンスストアなど「インフォーマルサービスと連携する」ことやこういった多くの目で地域を見守ることが「地域でネットワークを作る」ことにつながると気づくことができた。また、ケースカンファレンスやサービス担当者会議に同行して、多くの関係職種と「顔の見える関係作りをする」ことの重要性に気づくことができた。

## 2. 【安心した生活が続けられるよう支援】

〈対象者の個性を理解する〉〈信頼関係を構築する〉〈安心できる環境を作る〉〈迅速に対応する〉の4つのサブカテゴリーで構成された。

対象者や生活は様々であり、考え方や価値観も異なることから「生活習慣や生活背景の個性を大切に」「価値観を尊重する」という〈対象者の個性を理解する〉ことの大切さを深めていた。また、〈信頼関係を構築する〉ためには、「ニーズに合わせて関わる」「意思を尊重する」「一緒に考えていく」「受容する」「傾聴する」「コミュニケーション技術が必要である」ことを学んでいた。さらに、高齢者世帯や独居の対象者、その家族に対しても「不安や悩みに対して的確に答える」「安心につながるよう関わる」「緊急時の連絡体制を整える」ことで〈安心できる環境を作る〉ことにつながると学んでいた。また、会話からだけではなく、洗濯物が干されているか、電気メーターやポストの確認をするなど「生活全体から情報収集する」ことや対象者のほとんどが高齢者であり、何らかの病気や症状をもっているため、「小さな変化を見逃さない」「予測した対応をする」など〈迅速に対応する〉ことの重要性を学ん



でいた。

### 3. 【QOLの維持・向上への支援】

〈社会生活の維持を支援する〉〈自立した生活が送れるよう支援する〉の2つのサブカテゴリーで構成された。

〈社会生活の維持を支援する〉は、様々な理由で他者との交流が困難になってきても、「社会や人とのつながりを作る」ことで孤立しないよう支援の実践を学び、地域の事業を通して「生きがい作りのサポートをしている」ことを知り、地域全体への関心を広げていた。また、〈自立した生活が送れるよう支援する〉は、対象者に合わせた「情報や社会資源を提供する」ことで「自身で行えることが拡大するよう支援する」ことにもつながることを学んでいた。

### 4. 【自己の看護の意味づけ】

〈自己の看護を振り返る〉〈幅広い知識を身につける〉の2つのサブカテゴリーで構成された。

地域で生活する様々な対象の生活を目の当たりにすることで、「退院後の生活を見据えた関わりをする」「入院中から介護状況や生活状況を把握する」など入院から退院への継続看護の重要性を学んだ。また、地域包括支援センターの方に事前講義を受けたことで、具体的な事例からイメージ化ができ「寄り添った看護を行う」ことの大切さに気づき、〈自己の看護を振り返る〉ことができた。また、看護の知識だけでなく、〈幅広い知識を身につける〉ことの必要性を学んでいた。

## V. 考 察

地域包括支援センター実習の学びから明らかになった4つのカテゴリーと実習目標との関連を考察する。

### 1. 【他職種および地域連携】

病院実習は、医療者間の連携を見ることが多い。しかし、サービス担当者会議やケースカンファレンスの参加、同行訪問、相談場面の見学を通して、医療者間だけではなく保健福祉の専門職や診療所・病院、他の地域包括支援センター、デイサービス、デイケアなど各専門職種・機関が、それぞれの専門性を尊重しながら連携していることを学んでいたと考える。また、高齢者の地域での生活を支えるうえでも住民の相互扶助の促進は重要<sup>8)</sup>であり、地域包括支援センターがその核になって、専門職だけでは

なく、近所住民やボランティア・ガス会社・警察・新聞屋・コンビニエンスストアなどインフォーマルサービスと連携している実際を知り、「地域でネットワークを作ること」が、多くの目で対象者を支え見守ることになり、地域連携にもつながると感じることができたと考える。さらに、ケースカンファレンスやサービス担当者会議に参加して、電話やFAX、書面でのやりとりだけではなく、「顔の見える関係作りをする」ことが重要であり、全体的に地域連携という広い視野で捉えることができた。これらのことからカテゴリー【他職種および地域連携】は、目標1『地域で生活していけるよう総合的に支えるサポートシステムを知る』・目標4『関係職種との連携の実際を知る』に含まれる学びであると考ええる。

### 2. 【安心した生活が続けられるよう支援】

地域包括支援センターの専門職は、介護予防プラン作成や様々な相談を受けるなどニーズが高く、個別訪問をして生活の場に出向くことがほとんどであるが、対象者の中には経済的理由や認知症など様々な理由で訪問を拒否するケースもある。また、対象の多くは高齢者であるため、身体状況や理解力などを確認しながら、「生活習慣や生活背景の個別性を大切に」「価値観を尊重する」といった〈対象者の個別性を理解する〉ことが「ニーズに合わせて関わる」「意思を尊重する」「一緒に考えていく」「受容する」「傾聴する」や「コミュニケーション技術が必要である」など〈信頼関係を構築する〉ことにつながると感じていた。また、対象者や家族に対して「不安や悩みに対して的確に答える」ことや「安心につながるよう関わる」「緊急時の連絡体制を整える」ことは、精神的安定にもつながり、〈安心できる環境を作る〉ことが、住み慣れた場所で生活できると学んでいたと考える。さらに、在宅は、病院と異なり24時間専門職がいる訳でも、生活環境が整備されている訳でもない。また、虐待問題や生活困窮など困難な問題に直面しているケースもあり緊急を要する場合もある。起こりうる可能性のある問題を視野に入れ、日頃から会話だけでなく生活全体を情報収集し、〈迅速に対応する〉ことの重要性を学んでいた。このことからカテゴリー【安心した生活が続けられるよう支援】は、目標の内容以外の学びであった。これは、講義やその他の実習場所で、在宅看護の役割は『住み慣れた場所で療養者・家族

が安心して生活が送れるように支援することである』と伝えてきたことが、地域包括支援センター実習を通して学生の具体的理解につながったと考える。

### 3. 【QOLの維持・向上への支援】

訪問看護実習では、対象者のほとんどが要介護状態で疾患や障がいを持ちながら生活していると学んでいる。しかし、高齢者や認知症の独り暮らしなど様々な健康段階であり、様々な生活をしている対象者のイメージができたという記述もあるように、地域包括支援センター実習で初めて要介護状態になる前の要支援者も看護の対象であることを実感していた。学生は実習体験と講義で学んだことが結びつき、地域で生活している対象を理解出来たと考える。その対象者は地域住民として家族や社会生活の中で様々な役割を持ちながら生活を送っている。何らかの理由で他者との交流が困難な場合でも、地域社会からの孤立を防ぐために介護予防教室など事業に参加することで「社会とのつながりを作る」ことや生きがいを持ちながら生活できるよう「生きがい作りのサポートをしている」ことを学んだ。つまり、〈社会生活の維持を支援する〉ことも地域包括支援センターの重要な役割であることを学んでいた。さらに、「情報や社会資源を提供する」や「自身で行えることが拡大するよう支援する」ことで少しでも自分の力で行えることにより、充実感や自信につながる。潜在能力を最大限に引き出し、自身でできることを拡大していくことが〈自立した生活が送れるよう支援する〉ことになり、その結果、QOL維持と向上にもつながると学んでいたと考えられる。このことから、カテゴリー【QOLの維持・向上への支援】は、目標2『自立支援の実際を知る』・目標4『社会資源の情報提供と活用方法を理解する』に含まれる学びであると考ええる。

### 4. 【自己の看護の意味づけ】

訪問看護実習や退院調整部門実習での学びが含まれたことで、「退院後の生活を見据えた関わりをする」ことや「入院中から介護状況や生活状況を把握する」ことの重要性を学んでいた。また、病院実習での退院指導を振り返り、生活を視野に入れた退院指導をしたいと記すなど入院から退院への継続看護の重要性や自分の今後の看護の課題に気づいたことで、あらためて自己の看護観を築く機会になっていたと考える。さらに、地域包括支援センター実習を

通して、看護職だけではなく、様々な職種や制度、社会情勢について直に触れる機会をもつことで、その人らしい生活を支援するためには「寄り添った看護を行う」ことや保健福祉制度や生活全般についての知識を身につけるなど〈幅広い知識を身につける〉ことが必要であると学んでいた。このことから、カテゴリー【自己の看護の意味づけ】は、目標5『自己の看護観を深める』に含まれる学びであると考ええる。

## VI. 結 論

1. 地域包括支援センター実習の学生の学びの内容を分析した結果、【他職種および地域連携】【安心した生活が送れるよう支援】【QOLの維持・向上への支援】【自己の看護の意味づけ】の4カテゴリーが抽出された。
2. カテゴリー【他職種および地域連携】【QOLの維持・向上への支援】【自己の看護の意味づけ】の学びの内容から、実習目標を概ね達成していた。【安心した生活が続けられるよう支援】は、学生自身の気づきであり、対象理解や看護師以外の職種と関わる機会があったことで、より地域に視野を広げる学びにつながった。
3. 1日実習ではあるが、これらの学びから、地域包括支援センター実習の意義は大きいと考える。しかし、実習の展開によって、学びに差がでることや抽象的な理解であることが明らかとなった。具象的理解ができるよう、学生の学びの1つ1つの意味づけをしながら思考の整理をして、カンファレンスの充実や実習ガイダンスの内容など教育方法の工夫が示唆された。

## VII. おわりに

本研究の限界は、記録の中には学生自身の言葉の表現を抽出できない内容もあるため、今後、分析方法も含め研究方法の検討が必要である。

## 謝辞

本研究を行うにあたりご協力いただいた看護学生の皆様とお忙しい中、ご指導いただきました実習施設の皆様に深く感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 1) 総務省統計局。

<http://www.stat.go.jp/data/topics/topi630.htm>,  
2013.9.15.

- 2) 厚生労働省.  
[http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/kaigo\\_koureisha/chiiki-houkatsu/](http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/).2010.5.12.
- 3) 小路ますみ, 小森直美他. 在宅看護実習における学びの構造. 福岡県立大学看護学研究紀要, 4 (1), 10-18, 2007.
- 4) 田山友子, 吉田久美子. 在宅看護論実習における外来実習での学生の学び. 東京医科大学看護専門学校紀要, 23 (1), 37-45, 2013.
- 5) 吉田久美子, 峰村淳子. 在宅看護論実習における退院調整部門実習の学習効果と教育方法の検討. 東京医科大学看護専門学校紀要, 35 (1), 37-45, 2014.
- 6) 磯邊厚子. 地域包括支援センター実習の意義と看護の役割の可能性—高齢者支援についての一考察—. 京都府立看護短期大学紀要, 35, 33-41, 2011.
- 7) 村上敦子. 地域包括支援センター見学実習の学び—実習レポートより—. 東京厚生年金看護専門学校紀, 13 (1), 16-19, 2011.
- 8) 吉田礼維子, 和泉比佐子, 片倉洋子他. 介護予防システムを推進する保健師の活動. 老年社会化学, 32 (4), 443-452, 2011.